

按ずるに、三州事蹟誌に、安江八幡は卯辰八幡の別社にて、上安江村の氏神也。此の村昔は今の長家の第地にありたるよし云傳へたりと。此の傳説は誤りなり。又寛永十九年六月朔日の金澤町中定書に、町人長脇差さし申間敷、或は白山或は安江参り、或は宮腰其外諸見物之折柄刀をさし、奉公人に似せ候躰見付次第可爲曲言事。といふ一條を載せられたり。右安江参りとあるは、越中の安居の事ならんか。若し元より安江の事ならば、寛永の頃當社安江八幡参詣人甚だ繁昌なしたりけん。

○安江八幡神異傳話

咄隨筆に云ふ。安江木町若松屋十兵衛末子幸十郎、享保十年八月煩出し、大熱病にて、皆不食也。隣家に大坂屋十兵衛とて、醫道功者の藥種屋あり。故に呼んで見せければ、是は中々大病也。我等躰の療治いかゞ也。名醫衆へ被頼候へと云ひ、小兒料藤田道順可然とて申遣す。道順見て、是は虫氣也とて、虫藥を用ひけるに、次第に弱りて、最早存命不定の躰也。父十兵衛一向宗にて、祈念祈禱は我等の宗旨にはなしなど、日頃いひける口も違ひ、鍛冶町の八幡へ

行きて、當社の祈禱を頼みける由申入れけり。其の段神主聞いて、十八神供とて有之段被申聞。さらば其の御祈禱被成下候へといへば、今夜は成るまじく、明晝可相勤と也。十兵衛今宵限りの病人にて候まゝ、何とぞ早々奉願と、再三願ひ申聞るにぞ、神主も實にあはれと覺え、神供の用意中々急に出來する事にてはなけれども、幸ひ明日誂の神供を振りかへ、追付御祈禱可申と也。十兵衛悦び、忝きよし再三謝して立去る。日も暮れ、酉の下刻に成りけるに、折節風まじりて、大雨移すが如く降りて、十兵衛は取り所もなく濡れて歸りけり。母は蚊屋の内に病人を抱えて泣居たる心の内、思ひやられてせんかたなく、立つたり居たり、背戸へ行きかどへ行き、身の置處もなかりけり。せめて雨さへ降止まぬを、見るともなく大戸を開けば、わらんじはゞきしたる男四人、爰よかしこよと人の家を尋ね侘びたる躰成るを見捨て、内へ入り、蚊屋の内へはひ入りて、病人を抱きて見れば、最早息も絶々也。今生の暇乞と念佛申して居たる處、大戸をほとくと扣く。十兵衛は中買なれば、商に付きいか成事をいか成所より申來るならんと、肝

をひやせしが、さもなくて、十兵衛殿はこなたなるか、是は八幡よりの使也と云ふ聲の蚊屋の内へばつと光りのさしたるは、不思議成りける有さま也。十兵衛思はず飛出で、御札・守・御符・供物・神酒等を請取り、病人に頂戴させけり。病人は四・五日湯水をだにも不吞ば、二便の通用もなかりしに、小便せんと云ふ聲も達者に聞えけり。食氣も出來て、割粥少し用ひけり。秋の夜の長きも明けて、父の十兵衛思ふやう、若し道順老の見立違ひならんと、大坂屋十兵衛に相談す。大坂屋診脈して、是は殊之外宜しき方に見ゆ。かゝる事こそあれとて、魚住道徹を請待す。道徹見て、最早此の病人は助かる者にあらず。我等の手には不叶。道順の藥用ひ候へと也。道順も來られ、此の由聞きて、道徹の療治被頼候へと云ひて立歸りけり。家内の者ども達て道徹の療治を頼みける處、藥調合して、人參四分宛入れて用ひ候へとて被歸けるが、段々快氣して、二・三日の内に本復せり。是は全く八幡宮の御神徳なりと、父の十兵衛物語す。とあり。此の後々も種々靈異の事ども多しといへり。

○鍛冶町長徳寺

東派眞宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當時開基文明五年實善建立。元能美郡清水村に在之、金澤移住。慶長五年淺野將監奉にて鍛冶町に而地面拜領仕。とあり。按ずるに、東末寺内超雲寺由來書にも、文明五年實善建立。元能美郡清水村に居住。寛永七年東末寺看坊被申付。とあり。長徳寺の分れならん。故に其の由來同様に載せたるなるべし。

○鍛冶片原町  
元祿三年火災記に、鍛冶町・鍛冶片原町とあり。同九年地子町肝煎裁許附にも鍛冶片原町を記載せり。

○仁隨寺前  
舊藩中は仁隨寺の門前地なりし故に、仁隨寺前と呼べり。明治四年戸籍編成の時、田丸町に屬せしめられたり。

○木、新保仁隨寺  
東派眞宗道場也。明細帳に、當寺開基正誓、延徳三年二月創立。と記載するのみ。按ずるに、三箇屋版六用集に、東本願寺道場仁隨寺大衆免立町と見え、追加に當時木、新保弓町とあり。又元祿六年の士帳にも、大衆免立町仁隨寺向小路といふ事見たり。されば最前は大衆免立町にありし